
打ち上げ

来実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
打ち上げ

【Nコード】
N0267I

【作者名】
来実

【あらすじ】
体育祭の打ち上げ設定で、平和です。

前編

平次と和葉のクラスである1組は2連合であり、先週あった体育祭で見事優勝した。もちろん勝因は、運動神経抜群の平次と和葉である。

2連合で打ち上げをやるという話になりそれに参加する十数人は放課後教室で話しあっていた。

『しかし、リレーの和葉の追い上げ、めっちゃ興奮したわあ!』

『おおきに! 嬉しいわあ』

和葉と話しているのは、友達の里香。和葉が平次の事を好きな事も知っている。

『服部お前アンカーやってんなあ。』結局ぶっちぎりでゴールしてくれよって。めっちゃスカッとしたで!』

『当たり前や! この俺がアンカーやのに負けさせてたまるかい!』
平次と話しているのは、友達の智也。平次が和葉の事を最近気になっている事も知っている。

そして。

『服部くん、めっちゃかつこよかったでえ〜!』

『ほんまにい〜っ』

『さすが服部先輩やあ』

先輩後輩を問わず、服部に思いをよせる女子が何人かおり、黄色い声をあげている。

（なんやねん平次。女の子に囲まれよってに。そりゃ、あたしはただの幼なじみやけど…）

そして、

『和葉ちゃん凛々しかったぜ？』

『さすが遠山先輩っ』

和葉も似たようなもの。

（和葉のやつ、もうちょつとモテてるて自覚せえっ！ああ、面白いいわ）

もちろん平次と和葉はそれぞれ相手に嫉妬するだけで、自分が思いを寄せられている事など、気づかない。
そんなこんなで、話は進む。

『…で、場所はどうか？』

仕切っている3年生が尋ねる。

『誰か家提供してくれへんか？店やと酒飲めんし、騒げへんのや』

うーん、と、全員が考え込む。

『…そや！平次の家、広いで！この人数でも余裕や』

『おい和葉！なに言うねんっ！俺は嫌…』

『服部くんの家行ってみたいわあ』

『服部先輩のおうち…！』

『服部の家に決まりだな』

『…俺の意思は無視かい』

平次のつぶやきは誰もがスルーし、日時について話す。

全員の予定と照らし合わせ、5日後の午前中になった。

『午前中だけやとあんまり時間ないし、8時半に服部家集合や！』

ということになった。

服部ファンの女子のテンションが妙に高くなったのは、言うまでもない。

それから4日後。

『和葉!』

『平次? どないしたん? 部活は?』

『お前、聞いてへんのか? 遠山のおっちゃん、急遽出張になったんやて。せやから今日は俺んちに泊まりや。』

『そうなん? お父ちゃんも、平次んとこのおばちゃんやのうて、あたしに連絡すればええのに。』

『お前の勉強の邪魔せんようにて思ったんやろ。親馬鹿やからな、おっちゃん。ほな、行くで。』

『うん』

『平次のおばちゃん! お世話になりますー』

『いらっしゃい和葉ちゃん。未来の娘なんやから、遠慮せんといて』

『なに寝ぼけた事言うてんのやオバハン。あ、せや! 明日体育祭の打ち上げにこの家使うんや。明日は座敷あけといてな。』

『ええよ。』

やばっと和葉の顔が青くなる。

『おばちゃん！明日あたしが6時んなつても起きんかったら、叩き起こしてほしいねん！』

『なんでや、和葉？』

『平次のあほっ！明日、クラスメイトとか来んねんで！あたしが平次ち泊まつてんのバレたら、やばいやんっ』

『ほー』

『ほな、頼むのおばちゃん』

そう言つて、和葉はお風呂にいった。

『…和葉ちゃん。うちは、“わかった”とは言つてへんで？』

そこには、にまりと笑う静華の姿があった。

食事も済ませ、二人で平次の部屋でのんびりしていると、ふいに平次が口を開く。

『なあ和葉…。お前、好きな人とかおるんか？』

『な、なんやの急に。』

和葉の顔が赤くなる。

『いや…なんとなくや。』

『まあ…おるっちゃ、おる、けど…』

『ふーん』

平気な顔を装うが、平次は結構ショックを受けていた。

（和葉、好きな奴、おるんや…。）

ずっと自分だけの和葉だと思っていた。和葉の笑顔は自分だけのものと。でも、和葉が想っているのは、別の…。

『…なんかむかつく』

『え？なんか言った？』

『…なんもないわ』

『そう？それやったら、あたしそろそろ寝るな？』

そう言って隣の部屋に向かおうとする。

『一緒に寝るか？』

『あほっ！おやすみ！』

結構本気だったのに…と思いつつ、自分もベットに入った。

中編

コロコロコロ...

ピシャーーンッ

『なんや、雷かい』

平次がうとうとし始めた頃、激しい雷が鳴りはじめた。

ピシャーーンッ

ドーンッッ

派手な音をたてて、平次の睡眠を妨害する。

『やかまし……。あ。』

そういえば、和葉が大の雷嫌いであつた事を思い出した。

『大丈夫やるか?』

ピシャーーンッ

ガシャーーンッ

ゴロゴロ…

ガッシャーーンツツ

『…大丈夫じゃないかもしれんな』

心配になった平次は、隣の部屋を覗きにいく。

『…和葉、平気か？』

部屋に足を踏みいれると、ベッドの端っこで小さくなっている和葉を見つけた。

『…和葉』

びくっとしつつ、振り返った和葉の顔は、涙で濡れていた。

『…へーじ』

涙でうるうるした瞳で平次を見上げる。

（この顔は…やばい、かも）

平静を装いつつ、声をかける。

『怖かったんか？』

和葉は首を縦にブンブン振って平次に抱きついた。

（かつ…可愛ええ…）

『もう、大丈夫やからな』

優しく髪を撫でてやる。

和葉の震えは、少しずつ止まっていた。

（普段気イ強いくせして、めっちゃめっちゃ怖がりなんやもんなあ）

こんな和葉を知っているのは、おそらく自分だけだ。と少し優越感に浸る。

『落ち着いたか？和…』

寝とるし。

『しゃーないやつちゃ』

和葉をベットに寝かせて、部屋に戻ろうとした。

が。

『…うそやる』

和葉は、平次の服をぎゅっと握っている。

ちよー待て。もしかして、もしかしくても。

俺、ここで寝るしかないんか？

仕方なく、和葉の隣に横になる。

『…生殺しや』

と言いつつ、

平次は、眠る和葉を抱き寄せた。

『我慢代、これくらいもろてもええやんな？』

平次は腕の中に柔らかな身体を抱きしめながら眠りについた。

…もちろん。今の平次は明日の打ち上げの事など頭にない。

後編

ピンポン…

『はい』

『朝早くすんません。服部くん、おります?』

そこには、十数人の高校生がいた。

『ああ、打ち上げる言うてましたな、どうぞ。』

連合のみんなは、そろそろと家にあがった。

『なんや服部のお母さん、めっちゃ綺麗やんなあ』

『ほんまや。平次くんの顔が整ってるんも、わかるわあ』

『口の上手い高校生やねえ、おおきに。ところで、申し訳ないけど、平次まだ寝てるんや。起こしにいつてもらえます?』

『服部寝てるんかいな』

『服部先輩の寝顔…』

『平次君の部屋…』

呆れた顔の男子たちが、一部の、キヤーキヤーしてる女子を横目のため息をついた。

『和葉ちゃんこねえなあ』 『遠山先輩…』

和葉ファンもため息をつく。

『あら、和葉ちゃんなら、平次の部屋の隣の部屋で寝とりますけど』
静華はにやつとした。

『な、なんで!?!』

『嘘おゝ!?!』

全員がどよめきたつ。

一部の女子は、和葉に対して罵る言葉を言い、また男子全員が平次を羨んだ。

『服部あいつ、あんな可愛い遠山と一つ屋根の下で寝るなんて!許せねえな!』『顔に落書きでもしてやるか!』

『平次は2階の突き当たりの部屋に。和葉ちゃんはその隣の部屋に
おりますわ』

みんなは2階に昇っていった。

静華がまたにやりと笑う。『一つ屋根やのうて、一つ布団かもしれ
んで?』

1階で小さくつぶやいた。

『まずは服部の部屋だな。』

『起こしたら落書きできんから、静かに行こうや』

メンバーがそうつとドアを開ける。だが…

『お、おらんし!』

『なんでや?』

『まあええわ。そやったらとりあえず、遠山起こそか。』

可愛い女子の寝顔を拝めると、内心男子たちは小躍りしていた。

『開けるで?』

そーつとドアを開けると、メンバーは全員絶句した。

一緒のベッドで、しかも抱き合いながら寝ている平次と和葉をみつ

けたからである。

『…なんやこれ…』

『嘘や…』

『服部先輩どうして…』

『遠山和葉、許せない』

いろいろ声が飛び交うと、平次が目をこするのが見えた。

『まずい、隠れろ！』

メンバーは押し入れの中に隠れた。隙間から二人を除く。とっさに隠れた場所だったが、ベストポジションであった。

『う…ん』

平次が目を覚ます。

ふと、腕の中に温もりを感じた。

ふ…と優しい笑みがこぼれる。

『そか、昨日俺…』

そう言っつて昨晚の出来事を思い出した。

「昨日なにがあつたんや！」

押し入れの中でたくさんの疑問符が浮かんでいることに、平次は気づいていない。

平次は和葉の髪を指で弄ぶ。柔らかな頬に触ったりもしてみる。奴らがガン見していることには気づかずに。

『…そんな無防備な顔で、寝るなや…。』

（綺麗な唇やなあ…）

そう思った瞬間、平次は無意識に和葉に唇を重ねていた。

「あいつ…やりよった！」「そんなあ…」

「服部くん…嘘お…」

押し入れの中では、様々な感情が渦巻いていた。

『……ん、う…ん』

和葉が眉をひそめて、目を覚ました。

『…あれ、あたし…？』

『起きたん、和葉？』

『へっへへ平次！？なんでここにおるんっ？てかここあたしのベッ
トやんっ！』

『お前…覚えてへんのかボケ。昨日雷なつてたなあ？心優しい俺が様子見にいつてやったな？』

『…それは覚えとる』

『そしたらお前。ベそかいとつて、俺に抱き着いてきおつたなあ？』

『うん。それで平次になだめてもろて。それはわかるんよ。せやけど、そのあとは記憶ないねん』

『そりゃそうや。お前、俺の腕中でねこけよつたんやから。』
『う…。…ごめん。せやけど！そしたらうち寝かせて部屋戻ったらええやん！なんでわざわざここにおつたん！？』

「そうやそうや」

『…俺の服の裾、しーっかり握つて、離さんかったんはどここのどいつや。』

『え。』

『どうやって部屋戻ったらよかったん？』

『それは…』

『な』俺のせいとちゃうやろ。むしろお礼言つて欲しいくらいや』

『…ごめん…な？』

『お礼くれへんの？』

『…なんも持ってへん』

『そやな、和葉でええで？』

『…はっ？』

『じつとしとき』

『ちよっ…平次？』

〔なにやらかすつもりや服部！〕

〔嘘でしょ服部先輩…〕

平次は和葉を押し倒すと、和葉の顔の脇に手をつく。
平次はふう、と息をついた。

『…俺、和葉が好きやってん。』

『えっ…』

『和葉に好きな奴おるんはしつとる。だから、この言葉は忘れてく

れてええ。けど、今だけ夢見させてくれへんか？』

〔服部…〕

〔平次君…〕

『…あほ』

『…は？』

『あたしの好きな人で、平次やねんで？』
和葉はふわつと笑う。

『…このあほ女』

そう言って平次は深く口づける。

『…ん…んうっ……んっ』

「あーあ、やっちまった」 「服部先輩い…」

とその時、

ガタンっ

この光景は後輩の和葉ファンには耐えられなかったらしく、倒れてしまった。

『だれや!』

メンバー全員が、“まずい”という顔をしている。3年であるリーダーが、意を決して押し入れを開けた。

『……………!』

平次と和葉の顔が、みるみる赤くなっていく。

『すまん、服部? イイモン見さしてもらたわ♪』

『…おまえらあー!—!』
『ひいーっ』

このあと、壮絶な鬼ごっこが始まったことは、言うまでもない。

おまけ

平次の部屋には十数人の高校生たち。その中の男子たちは全員傷だらけだ。なぜなら、先程まで壮絶な鬼ごっこがくり広げられていたからである。

『服部も、ここまで怒ることないやんなあ…』
『ほんまや』

『ほう…？』

とてつもなく冷たい視線が彼らに突き刺さった。男子たちは背筋が凍るかと思った。

『…悪趣味な事しよってからに。押し入れに隠れてまで覗くとはなあ…？』

『お、怒んなて』
『そや、お、落ち着け服部？』

『へーじ。いい加減許したたらどうや？うちら女子はとっくに仲直りしたで』

『さすが和葉ちゃんだ、服部と違って心広いわ』

『…ふん。』

『なー和葉ちゃん、こんな短気な男やめて、俺にしとき？』

冗談まじりにひとりの先輩が言う。

『あははっ先輩も冗談きついわあ』

『本気やで〜』

『またまた〜』

冗談半分なのは周りにもわかるくらい明らかだ。空気も和やかで、だが、鈍感でさらに機嫌の悪い平次には、通じなかった。

『おのれら、なに抜かしとんじやい』

『ちよっ…目えすわつとるで平次！？「冗談くらいわかるやろ？」』

『うっさい！俺は今虫のいどころが悪いんじや！』

『えっきゃ……』

人目もはばからず、平次はキスをした。

『この女はぜーったい誰にもやらんからな！』

ヒューっと、周りのはやしたてた。『服部やるうー』
『珍しくキャラ壊れたなあ』

『この……どあほ——————!!』

真っ赤になった和葉は、平次の顔を殴って、部屋をでていった。

『あかん……、服部気絶しとるわ。さすが和葉ちゃん、合気道やっ
るだけある』

『…なあ、この空き缶誰のや？アルコール度数めっちゃ高いんが力
ラになっとるでっ。』

『…………服部やな』

『服部先輩酔ってたんですね、それであんな…』

『…お前ら、もう和葉ちゃんの前で服部に酒飲ましたらあかんで？』

『了解』

こうして打ち上げは無事(?)に終了したのであった。

…めでたし？

F i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0267i/>

打ち上げ

2010年10月10日13時19分発行